

体育のあとで..

無理矢理パイズリ..

# ポーカール少女の放課後！

他にも..あんなことやこんなこと..♡

全シーンに動きのある差分・フィニッシュあり！

強制フェラ..

寝ている最中に..

あにめーる



「澪ちゃん見てたら…」

「ほらあ…僕のココ…こんなになっちゃったよ。」

「せ、責任…とってもらわないと…ハア…ハア…」

ムッ

ビクッ

「い、いやっ…」

「ち、近づくなあっ…」

「そんなこと言ったも、ほらっ…」

ポロンッ

「湊ちゃんのせいで、チ○ポの腫れがおさまらないんだっ」

「これは、大変だよッ！」

ズッ

「うっ…そ…そんなバカなこと…」

（な、なに…これ…すごくビクビクしてるし…）

（それに…どんどん大きくなってる…）

「大変って言われても…わたし…ど、どうすれば…」

「ハア…ハア…そうだね湊ちゃん…今から教えてあげるよっ」



「ハアハア…最高だよッ」

「ボーカルもやってるだけあって…お口も絶品だねッ…」

「ああ…湊ちゃんのおま○こ良すぎて…もうイッチャいそうだよ…」

ずちゅっ

ゲチゅッ

ぬいっ

「うう…おえ…うぷ…あ…あう…」

(ひ…酷いよ…こんな強引に…)

「ハアッ…ハアッ…も…もう出そうだよッ…」

「湊ちゃんのお口にザーメンたっぷり出してあげるからねッ」

「あああああッ…で、出るうううッ…」

ドジュッ…ジュルル…ドジュッ…びやる…

ジュルルッ

「うぶうッ!?」

「あう…うう…」

(く、く、く、口の中に…何が出されてる…)

ジュルッ…ドクッ…ドクッ…ジュクッ…

「あぁっ…透ちゃんの口ま〇こに大量射精してるよおおッ…」

ドクドク…ビュッ…ビュビュ…

「ハアッ…ハアッ…射精止まんないよ…」

「澪ちゃんのお口の中…精液でいっぱいなのがあるよっっ」

ビュルルッ…ゴポッ…

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

「…ええ…あう…うう…うう…うづう…」

(の…喉の奥に…うう…うう…男の人の…せ…せ…せ…あう…)

(く…口の中に直接出すなんて…ひどいよお…)

「ハア…ハア…ほらあ…まだ尿道に残ってる精液も吸い出すんだよっ」

ズ  
ズ  
ズ

ム  
ッ  
ッ

「うう…こ…こんなこと…」

(のどにも…口にも、ネバネバした精液がこびりついてる…)

「あ…あ…いいよ凌ちゃん…」

「その調子で全部頼むよッ」





「ふう〜…最高に良かったよ澪ちゃん。」

「かわいい澪ちゃんがお口でこんなに奉仕してくれるなんて…」

「フフ…けい〇ん部のみんなが知ったらどんな顔するだろうねっ (笑)」

ドロオ

「う…うう…」

「み…みんなには…言うなあ…」



「ほら、お口の中のザーメン早く出さないよ」

「歌ってる最中に臭いでみんなにでべしちゃうよっ」

「お…おええ…うっ…あうう…」

「の…のどに絡みついで…で、出てこないよお…」

ドロドロ

「ハアハア…すぐくエロいよ…」

「澁ちゃんに口内射精一発じゃあ物足りなくなってきたよッ」





「ふふ…せっかくお口以外にもイイもの持ってるんだから…」

「ここも使わないとねっ♪」

「ちょ、ちよっと…何をするんだっ!？」

「は、はなせえ…。」

「ハアハア…きれいなおっぱいしてるね？」

「い、いやあ…見るなあ…」

「は…恥ずかしい…」

スルッ

スルッ

「けい○ん部でも一番大きなおっぱいしてるんだから…」  
「男のチ○ポのために使わないと損だよ澪ちゃんっ。」



「ここはね、こういう風に」

「男のチ○ポを挟んで：オナホとして使うんだよ？」

「お…おなツ？…なに、何を言ってるんだっ…」

「うう…やめろお…そ、そんなもの…は…挟むなあ…」

「ハアツハアツ…透ちちゃんのおっぱい…やわらかくて気持ちいいよっ」





「あまつ…澪ちゃんのパイズリ…」

「オナホとしても最高に使えるよッ」

「ハアッ…ハアッ…も…もう出ちやいそうだよ…ッ」

「あうう…んっ…うっ…」

「そ、そんなに激しく動かすなあ…」

「ああ…イクッ…もう出そうっ…ハアッ…ハアッ…」

「あまつ…もう…イクよッ！…澪ちゃんにぶっかけてあげるからね…ッ」

「えっ!?…ちよ…かけるって…や、やめッ…」

アッ

ゴッ



「で、出るうつつつ……」

「おっ、おっ」

「おっ、おっ」

「おっ、おっ」

「ぶぶぶぶぶぶぶぶ」

「……いやあ……顔に……うう……」

「ふう〜」

「おっぱいが気持ち良かったから、つい勢いよく射精しちゃったよっ」

「フフ…ごめんね」

「かわいい顔が精液まみれだよ凄ちゃんっ」

ドクッ

ドクッ

んんん

「ふう…ひどいよお…こんなに…出すなんて…」  
（顔も…髪も…せ…精液で…べとべとだよお…）





「じゃあね、漣ちゃん」

「今日のことけい〇ん部のみんなに知られたくなかったら」

「また、宜しく頼むよっ」

「うう…ひくっ…」

「も…もう許してよお…」



今日もまたあの男に呼び出された…

「また…イヤらしいこと…してこないと良いんだけど…」

「やあ、澪ちゃん。言うどおりに来てくれたんだねっ」

「フフフ…もしかして、エッチなこと期待してた…？（笑）」

「ちがっ…この前のこと…言われたくないからだ…」

「まあ、いいよ。じゃあ今日は澪ちゃん」

「僕の前でオナニーしてみようか」

「えっ…お…お…オナニー…って…」

「うう…そ…そんなこと…いやだっ」

「いいの？澪ちゃん」

「言うこと聞かないと…フフフ、分かるよね？」

「ほら、足開いてよく見えるようにね。」

「うう…っ」



「うう…は…恥ずかしい…」

「どうどう…澁ちゃんかわいい縋パンがよく見えるようにね」

「み…見るなあ…」

カー

「あ、ごつもしてるようね…」



「うう…んっ…んっ…」

「いいよ…澁ちゃん、すぐくエッチだよっ」

「いつもは、胸も一握に揉んでるんだね(笑)」

「うっ…ぞ…それは…んっ…くう…」

じゅ

もみ

スっ

スっ

「ハアハア…ほら、パンツの上からじゃなくて」

「いつもは直接おま〇こいじってるんでしょッ！」

「…くっ…うっ…」

「フフ…何だかんだ言ってるわりにしっぴかりアソコは濡れてるんだね？」

「んっ…こ…これは…ちがっ…んっ…」

「(どうして…からだだがどんどん疼いでくるう…)」

ぬ  
ち  
ゃ  
め

「もしかして…見られながらオナニーするのがそんなに気持ちよかった？」  
「ほら…もっといつもしてるように激しくオナニーするんだよっ！」

「んんっ…あっ…ああ…んっ…なに…これ…んっ…あん…」

（これ以上はダメなのに…わ…わたし…見られて…こんななに…感じてる…）

「ハアハア…いいよ澪ちゃん」

「澪ちゃんのオナニー姿見てるだけでもう…僕のチ○ポ限界だよっ」

「ああ…なにかくる…あん…はあ…あっ…あぁっ…」

（男の人の前で…わ…わたし…いつ…いつちやう…）

ビクッ

「澪ちゃん、もうイキそうなの？」

「いいよ…澪ちゃんのイク姿見ててあげるから…っ」

「あん…ああ…うう…い…いくう…あっ…ああああ…んんんんん…」





「はあ…はあ…ああ…あはあ…はあ…」  
（…イッチャった…見られてるのに…）

「ハアハア…すごいイキッぱりだったねっ」

「ほら…パンツも床も濡ちやんの夢液でビシヨビシヨだよっ。」

（ダメ…わたしの体…全然疼きがおさまらない…）

「フフ…濡ちやん」

「次はね、パンツを脱いでおねだりするんだっ」

ビクッ

「うう…そ…そんなっ…」

「分かってるんだよ？」

「さっきから濡ちやんのおま〇こ、物欲しそうにヒクヒクしてるよっ」

（いけないことなのに…も…もう我慢…出来ない…）

（一回だけなんだ…。みんな…ごめん…わ…わたし…我慢出来ないの…）





「こ…これで…いいだろう…」

「ダメだよ澪ちゃん」

「ちちゃんと声に出して…ちちゃんとおねだりするんだっ」

「アァ…」

はぁ

はぁ

「わ…わたしの…お…お…おまのこに…あなたの大きなモノを…入れて下さいっッッ！」

「ハァハァ…よく出来たね澪ちゃん…す…す…すぐくエロいよっ…」

「じゃあ…今からご褒美をあげるよっ」

くはぁ♡



「フフ…澪ちゃんがたまご広げておねだりするなんて…」  
「泉はずごくエッチな女の子だったんだね…(笑)」

はあ

はあ

「うう…そ…そんなこと…」

「アソコからエッチなお汁をそんなに垂れ流して…」

「澪ちゃん、待っててね…今準備するからっ」

じろお





「ハァハァ...もう入れる前から射精そうだよ...漣ちゃん」

「ううっ...す...すごく大きくなってる...」  
(...こんなに大きいのに...入らないわ...)

グッ  
グッ

ズルッ

「ほらあ…澪ちゃんの大仕事なところにち○ぽが入っていくの…わかる？」

「あぁあ…は…入ってくる…あつ…あぁ…い…痛いッ」

「さすがに…未使用ま○こだけにキツイねッ…」

「メキユッ」



「うんっ！…あぁっ！」

「ハア…ハア…澪ちゃんのおま○こ…すごくヌルヌルしてて…気持ちいいよっ」

ズッ  
ズッ  
ズッ

「あうっ…あんっ…んっ…お…お願い…もっとゆっく…」

「(こ…こんなにも乱暴に動かされてるのに…わたしのおま○こ…きゅーってなってるう…)」

「ああ…いいよ澪ちゃん…ハアッ…ハアッ…良すぎて、もう…射精そうだよ…」

「このままナカに出していい？…出しちゃうよ…っ…澪ちゃん…」

「えっ…ナカって!?…だ…だめっ…」

「お…お願いっ…外に…出してっ！」

「ハア…ハア…あああ…も…もうイクッ…イクよっ…澪ちゃん」

「子宮ま精子が届くようにたっぷりと中出してあげてあげるからねッッ…アアッ…」

ズッ  
ズッ  
ズッ

ズッ  
ズッ  
ズッ

ズッ  
ズッ  
ズッ



「はあ…はあ…ううう…な…ナカは…ダメって言ったのに…」  
「ご…こんなにはたくさん出して…あ…赤ちゃん出来たらどうするんだ…」

はあ

はあ

「うう…まだ…中から精液があふれてるう…」

「ハア…ハア…よかったよ、澁ちゃん…」

「奥までたっぷりと膣内射精したから、もしかしたら孕んでるかもねっ」





「最後はやっぱり澪ちゃんのカワイイ顔に…」

「えっ…あぁっ…いい…いやあ…」

グッ  
グッ  
グッ

「ハアハア…も…もう…出そうだよっ」

「ほら、顔こっち向けてッー」

「澪ちゃんにたっぷりとザーメンミルクかけてあげるからねっ」

ヌキヤッ

シッ

シッ





「ハア…ハア…と発目なのにまたこんなに落ちちゃったよ…」

「あうう…うう…こ…こんなに顔に出すなんて…」

「ひ…ひ…」

「フフ…顔中ゲームンまみれで精液の臭い漂わせてる澁ちゃんも…」  
「すごく…エロくて綺麗だよ(笑)」

ドロ

ん



「やあ、漣ちゃん。」

「ちよ…ちよつと…体育の後なんだ。」

「先に着替えさせてくれよお…」

「いいんだよ、体操服もまたミニブックで興奮するだろう？」

「うう…そんなこと…」

「それに…まだ人だっているし…」

「誰かに見られたりしたら…どうするんだよお…」





「いいから、いいからっ」

「さあ、邪魔なものはヌギヌギしましょうねっ」

「あっ!?...」で脱がすなよお...」

ス、



カーッ！

「そ…そんな」と…」

「フフ…やっぱり体育の後だけあって」「透ちゃんのお尻…すごい汗のにおいだよ…」

むっ

あむあむ





「あぁっ…あぁぁ…い…いきなり入れるなんてっ…うう…」

「ハア…ハア…澁ちゃんのココ…もうヌルヌルしてて…」

「僕の子○ポがすんなり入ったよっ」

ズ

い  
い  
い

グ  
グ  
グ



あん、

びゅん、

「ハアッ…ハアッ…いいよ澪ちゃん…」

「澪ちゃんの汗とトロトロの愛液が絡んでチ○ポ気持ちいいよッ」

「んっ…あっ…んんっ…あっ…あっ…」

「こ…こんなこと…だめ…なのに…あぁっ…んっ…」

（ど…どうして…体が反応してるんだ…）

びゅん

はあ

「ハア…ハア…そんななにエッチな声出しちゃって…」

「イきそうなの？…いいよ、一緒にイこうよっ…」

「また…たっぴりと中に出してあげるからね」

「はあ…あんっ…あっ…な…中は…ダメス…」

（で…でも…気持ちよくて…あぁ…わ…わたし…）

グチュッ

びゅん

グチュッ

グチュッ





「で…射精るうううッ」

ドビュッ…ドビュ…ドビュル…ドビュクッ…ドビュルル…

「ああああっっ」

(な…中でドビュドビュっ…すごい…また精子出されてる…)

ドビュッ

ドビュッ

ドビュッ

ドビュッ

はあ

「ああ…うう…こ…こんなにまた出すなんて…」

「…のあとどうするんだよ…」

「フフ…もうザーメンまのこた。パンツにも精液がこびりついて…」

「フフ…さすがにシャワー浴びないと…においでバシちゃうかもねっ (笑)」

はあ

「うう…ひ…ひどいよお…」

「ま…まだアソコからあ…あふれてる…」

「パンツも…ぐしよぐしよで…うう…き…気持ち悪いよお…」

「じゃあ、濑ちゃん。そのまま次の授業も頑張っってね (笑)」



「おや、澪ちゃん…寝てるのかな？」

「スゥー…フゥー…」

「澪ちゃんの寝顔…すごくかわいい…」

「でも、誰もいない音楽室で、お昼寝なんて、すこし無防備だよ。」

すず

「けい〇ん部の部員はまだ来てないみたいだし…フフ…」



「音楽室で居眠する悪い子はおしおきだよっ」

「澪ちゃんが悪いんだよ…?」

「こんなパンツが見える無防備な格好で寝てるから…」

「僕…興奮してきちゃったよ…」

「んん…」  
スッ

澪ちゃんは触られても全く起きる気配はなかった。



「あいかわらず湊ちゃんのおマ○コはいつもキレイだねっ」

「いつも僕の子○ポをおいしそうにくわえこんでるのに…」

「フフ：まるでまだ未使用のマ○コみたいだよっ」

グ  
イッ



「ぐっすり眠ってるみたいだし夢の中で気持ちよくしてあげるよッ」

グチュッ…ヌチュッ…ヌチュ…くちゅ…

「んっ…はぁ…はぁ…んっ…うんっ…」

寝ているのに澪ちゃんの下半身はすぐく敏感に反応していた。

「澪ちゃんのココ…どんどん愛液があふれてきている…」

「寝ながらも感じるなんて…よほど欲求不満なのかな(笑)」





「はあ…はあ…んっ…うんっ…はあ…」

「これだけ、濡れてたらもう大丈夫だよな？」  
「僕…もう我慢できなくなってきたよっ」

はあ

じんじん

じんじん

とろろお

「ほら…僕のココ、もうこんなに大きくなったんだよ…」

「ハアハア…澪ちゃん寝顔がかわいいから」

「いいよね？澪ちゃん…チ○ポ入れちゃうからねっ…」

「ん…んん…」

んっ

グ  
グ  
グ









「ハアッ…ハアッ…無抵抗の体を犯すのも…案外いいもんだっ…」

「あ…んっ…はあ…はっ…んっ…」

はあ

はあ

はあ

「そんなに息荒くして…寝ながらエロい喘ぎ声まで出して…」

「本当は起きてるんじゃないの？」

「起きないなら…ハアハア…このまま中出しするからねッ…」





「ハア…ハア…たつぷりと出ちやったよっ…」

「はあ…はあ…んぐんぐん…」

はあ

んはっ

「それにしても澁ちゃん…ここまで犯しても起きないなんて…」  
「一度寝るとなかなか起きない女の子だったんだねっ…」

キッパッ

エロ

エロ



「フフ：澁ちゃんもまさか自分が昏睡レイプされてるなんて…」  
「夢にも思わないだろうな (笑)」

「ふっ…ふっ…」

「やんや…」

おっぱい

すっ

すっ



「せっかくだから、この可愛い寝顔でもう「癡又いていくかなっ」

「ハアハア…もうすぐ出すよ澁ちゃん」

「今からそのかわいい顔にザーメンパックしてあげるからねっ…」

「ハア…ハア…あぁっ…もう…イキそう…」

「だ…射精すよ澁ちゃんの顔にぶっかけてあげるからねッ…」



「射精るうううッッッッッ」

ゴッゴッ...ピッピッ...ジュル...びちやっ...びちやっ...

ジュルッッッッッ

ジュルッ

ジュルッッッッッ

ん...んんっ...

ジュルッ



「ハア…ハア…」

「2発目なのに…顔射でこんなに打ちやっただよ…」

「やっぱり澁ちゃんには精液が似合ってるよ」

「んっ」

「ドクッ」

「スウウ…スウウ…んっ…んっ」

「ドロオ」

「じゃあねっ…澁ちゃん。」

「け○おん部のみんなが来る前に起きないと」

「顔もおま○こも精液まみれの恥ずかしい姿が見られちゃうよ…」 (笑)